

コーディネーター：亙理 陽一（静岡大学）

コメンテーター： 高木 亜希子（青山学院大学）
阪上 辰也（広島大学）
大和 知史（神戸大学）
近藤 悠介（早稲田大学）

研究法セミナーでは、浦野 研・亙理 陽一・田中 武夫・藤田 卓郎・高木 亜希子・酒井 英樹『はじめての英語教育研究：押さえておきたいコツとポイント』（研究社，2016年）に結実した一般的指針を踏まえ、過去三大会において、公募により選ばれた研究課題を検討する公開ゼミナールを開催してきた。今年も具体的な研究計画の提示を広く公募し、研究法・分析法について多様な専門領域の研究者からコメントをもらうことで、当該研究の意義や課題をより明確にするためにはどういうことを考える必要があるのかを参加者全員で深めたい。なお、四回の公開ゼミナールで得られた知見をまとめ研究法セミナーを次の段階に進めるべく、研究の「種」を公開ゼミナールとして検討する場の共有は今年度で最後とする。

「日本人による英語発話の理解性に関わる音声・語彙文法的要因の検証：評価者の L1 による影響」

提案者：三上 綾介（名古屋大学大学院生）

近年、英語学習者（以下、NNS）による発話の理解の容易さ（以下、理解性）にはどのような言語的特徴が影響を与えているのかを調査する研究が盛んである（e.g., Saito & Shintani, 2016）。そして NNS の発話の理解性には分節音や超分節音などの音声的要因のみならず、語彙の適切さや文法的正確さなどの語彙文法的要因も関連していることが明らかとなっている（e.g., Saito & Shintani, 2016）。しかしながら、多くの研究（e.g., Isaacs & Trofimovich, 2012）では、NNS の発話の理解性を評価しているのは英語母語話者（以下、NS）であり、NNS 間のコミュニケーションにも英語は広く使用されているという見方が不足している。そこで本研究では、NNS の発話を、別の NNS が理解性の観点から評価する際、その評価に影響する言語的要因が、評価者の母語（以下、L1）によって異なるかを検証する。

発話者は日本語を L1 とする NNS（以下、J-NNS）20 名、評価者は NS、中国語を L1 とする NNS、発話者とは異なる J-NNS、各 20 名の 3 群とする。先行研究（e.g., Isaacs & Trofimovich, 2012）に従い、まず、発話者の J-NNS に 8 コママンガの絵描写課題を課し音声データを収集する。実験者はそれぞれの音声データから発話開始直後の約 30 秒を抜粋し、理解性の評価対象の音声を作成する。その後、評価者は作成した音声を聴き、9 段階（1 = difficult to understand, 9 = easy to understand）で発話の理解性を評価する。さらに、理解性の評価者とは異なる 5 名の NS が作成した約 30 秒の発話の音声的特徴と語彙文法的特徴を 1000 段階で評価する。最後に、それらの言語的特徴の指標値と発話の理解性の評価値を、重回帰分析を用いて分析する。